クロス屋ナオト関が原の合戦

鮭太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クロス屋ナオト関が原の合戦

【Ｎコード】
Ｎ７０３９Ｓ

【作者名】
鮭太郎

【あらすじ】
クロス屋ナオトと妹ユイカはタイムスリップして関が原の戦いの時代に入ってしまった。
ナオトは、石田三成の末裔である。石田三成の一家が死んでしまったら、元の時代にもどれなくなってしまう。
ナオトを守るアカハラリエ（鳥の神）も一緒にタイムスリップしてナオトを助けるために追いかけてきた。

そして、戦いがはじまる

時空の関が原の戦い

クロス屋ナオトスズメの恩返しの中の話になるが別編とします。

クロス屋ナオトは、中古住宅に迷ってるスズメを助けた。

なんどースズメは、鳥の神ガルーダの娘だった
1億五千年万円前　始祖鳥の時代後　天界の太陽神から鳥獣の神と命名された神である
人間に変身すれば。アカハラリエという
アカハラは、ナオトの前に現れた。
「私が、アカハラリエです。使命をうけて現世に来ました。ナオトさん、私はあなたを助けることができます。後々にあなたに協力してもらうことになります。」

ナオトは、突然の出来事に金縛りにあっているような状態である

アカハラ「歴史を変えたり、世の中の流れを急激に変えることをすれば、私たちは時空に押しつぶされてきえてしまいます。それ以外のことなら可能です。」

アカハラ「なにかあったら、呼んでください、今日はあいさつとうことで。さようなら・・」

そういうと、目の前にいた人たちは消え
鳥となった、空へ消えていった

ナオトは、石田直人。　石田三成の末裔（まつえい。子孫）だった

のである。

突然、時空を超えて関が原の戦いの時代にに迷い込んだ。

太閤秀吉死去

１５９７年５月　秀吉は病床についた。

戦国の世
信長の草履とり（武士以下の存在）から、一挙に日本国の頂上に駆け登った太閤秀吉の生涯が閉じようとしている

秀吉はこの世で、ほしいものはすべて手に入る。
しかし、寿命には勝てなかった。
すでに、自分の死を予感していた。
下克上で天下を取った秀吉は、今川、武田、浅井、明智、朝倉、柴田すべての武将が、家が戦いによってほろぼされたのを、みている。
なぜならば、信長、秀吉が滅ぼしてきたからだ。

自分が死ねば、覇権争いが必ず起こることは秀吉はわかっている
一番心配なのは、目の中に入れても痛くない　息子　秀頼である
この時、秀頼は６歳である

秀吉は淀君に「三成を呼べ」

佐和山城から三成は伏見城に着いた
頭の切れる文官の三成は豊臣家・世継ぎ秀頼君をどうやって守っていくか書類をまとめていたところであった、合戦に告ぐ合戦、一揆、まだ国は安定はしていない。

三成は、秀吉の枕元にきた

秀吉「三成か、わしはもう長くはない、秀頼を頼む。あとはまかせ

る。。」
病状は悪化しているのであろう、三成が秀吉の口元に耳をあててやっと話がきこえるぐらいである。
三成「おまかせあれ、太閤殿下・・」
三成の工作どうりに事が進んだ
五大老に秀頼をたのむという遺言状を　五大老、五奉行に同様の趣旨の誓紙をかわさした。
その後、全国の諸大名に血判証文を提出させた。
五大老　徳川家康、前田利家、毛利輝元、宇喜多秀家　小早川隆景
五奉行　石田三成　前田玄以　浅野長政　増田長盛　長束正家
どんな誓書も絵に書いた餅同様である
小牧、長久手の戦いで対峙した家康は、実力者であり覇権をねらっている
7月　五大老、五奉行が秀吉の御前に呼ばれた
秀吉が「皆の物、豊臣家、秀頼を頼み申しますぞ」
家康「太閤殿下、この家康がいるかぎり豊臣家と秀頼君はお守り申し上げます。弓ひくものがいれば。この家康が成敗してみせます」
秀吉「なんと、心強いものか　皆の物たのんだぞ！」、」
横には、秀頼と淀君が座っている。

全員「ははーーっ、」

翌月　８月秀吉は　生涯を遂げた

露と落ち露と消えにし我が身かな
浪速のことは夢のまた夢

時世の句である

４００年以上も前である

前田利家の死　家康の陰謀

慶長４年　元日前田利家は秀頼公を抱き伏見城で諸侯の年賀を受けた。

秀頼が１５歳になるまで利家が大坂城で教育するという秀吉の遺言のためだ。

太閤秀吉がいなくなった今、幼い秀頼公の伝役（もりやく）ということは豊臣家の最高権力者である。

信長公が本能寺で倒れた後、秀吉も信長公の幼子、三法師の後見役として権力者の地位を確立した。

目の前で、秀頼を抱いている前田利家公を諸侯たちは見て加賀百万石の前田利家の地位を感じ始めている。

覇権を狙う、徳川家康、
すべて秀吉のために人生を捧げてきた石田三成も心中穏やかでない。

家康の心「うううっ・・利家さえいなければ、豊臣は手中にできるのに・・」
家康は爪を噛んだ

家康はしばしば爪を噛む
怒り、動揺など、強い感情が起こると大量のアドレナリンが体中を走り
自分を抑えきれなくなる
　爪を噛んでそれを抑えているのだ。

家康も若くない　５６歳である　戦国時代の平均寿命は３０～４０歳ぐらいではなかったのだろうか。
家康には時間がない焦る気持ちもわかる。

朝鮮から部隊が撤退完了を待ち、１月５日になって秀吉の喪が公表される。

秀頼、淀君　前田利家　石田三成など諸将が大坂城に入った
家康は秀吉の遺言どうりに政務のために伏見城に入った。

大きな力が二分化されたのもそのときからである。

家康は動いた。

大名同士が姻戚関係を結ぶことを禁止していたが、伊達、福島、蜂須賀など次々と姻戚関係を結んで勢力を拡大していった。
１５９９年１月
前田利家四大老、五奉行が使者を送り詰問したが、いうことをきかない。

前田利家「家康殿、豊臣家は大名が勝手に縁組するのは禁止している。五大老、五奉行で合議するようにしてもらわなければ困る！」

合戦、野戦の実力は、家康のほうが利家より断然上である。しかし、秀頼公の守り役という絶対的な権力のバックアップがある以上、ここで家康が刃向かっても大儀がない。
豊臣家全体から言えば、この時点の戦力では家康は勝ち目はない。
家康「なにをいいましょうか。私は、秀頼(おんため)公恩為に姻戚関係を結ん

でいるわけです。力をつけて、秀頼公に刃をむける諸将がいるなら、私が打ち滅ぼしてやりましょう。私は、太閤殿下に秀頼公をお守りすると約束しました。どうか、お心察してくださいませ。」

まさに、狸芝居である。

利家「以後、気をつけなされ。」

家康は、深々と頭を下げた。

次に、五奉行に同じように姻戚を結んだことを詰問された。

三成が詰問する

三成「豊臣家に無断で姻戚関係をむすぶとは、言語道断　以後許しませんぞ！」

三成は、秀吉あっての三成である。秀吉という強大な力の後ろ盾を失った今、ただの役人である。

徳川２５０万石ＶＳ石田２１万石である。格がちがいすぎる。

家康「許しませんぞ？許さないというのならどうされるのでしょうか。この家康の首でも討ろうとでもいうのでしょうか」センスで、自分の首を打つ仕草をする。

前田利家に詰問されたときとはまったく態度がちがう

家康は、三成から視線をはずした、数分沈黙が続いた

数分だが数時間にも感じられる重い空気であった。

家康は心の中で「この辺でいいだろ今は、」

家康は突然態度をかえた。礼儀正しく座りなおした。

家康「三成殿、失礼を申しました。秀頼公を思う気持ちは同じでございます。今後姻戚関係を結ぶときは五大老、五奉行にご相談いたします。」

三成「以後、よろしくおねがいします」

三成はこのとき、自分の非力さと家康の天下取りの野望を感じた早く手を打たなければと焦った・・・

三成「　内府（家康）めが・・・・・・許すものか・・」

三月三日　前田利家が病死し

一気に天下の形勢は、うごいた・・

クロス屋ナオト戦国時代に突入、

ナオトは、晴海の妹の友達の姉、未亡人中川幸代邸のトイレ工事が終わり家に帰ってきた。

ナオトの自宅の事務所で、工事現場の発注書や、工程の進み具合予定を確認していた。

「トントン」ドアをノックする音がする

妹ユイカ「おにいちゃん～いる？」

ナオト「何だ、ユイカ」

ユイカ「今日は、幸代さんところありがとう。電話があったわ。用事なかったら。

もんじゃ焼きの角山いこうよ～～。あたしがおごるわ！」

ナオト「いいよ、いこうかぁ、着替えるかぁ、・・まっいか。そのままいこう」

二人は角山に向かった歩いて二分ぐらいである。

角山親父「らっしゃい、、、珍しいね兄妹そろって・・なにする？」

ナオト「とりあえず生ビール二つとめんたいチーズもんじゃ二つ、生ビール先にもってきてね」

角山親父「はいよ～、超特急で生～！！」奥のアルバイトに注文する

ユイカ「カンパーイ～！！」
二人はグラスを合わせる
ユイカ「お兄ちゃん、トイレのクロス貼り手際よくて早く綺麗におわったって幸代さんよろこんでたよ。・ありがとうね・・幸代さん美人だったでしょ～」
ナオト「なんだよ、、、ま、　美人だね（笑）。四越デパートのほうは慣れたかれたか」
ユイカ「うん、楽しいよ～。」」
久しぶりに兄妹で会話が弾んだ
お好み焼きもたべた、最後の焼きそばも食べおわった。
ナオト「じゃ、いくか、帰ろう　角山親父、勘定してよ」
角山親父「５２００万円～」親父は元気がいい、
ナオト「あんがと」
二人は店をでた、
一分ぐらい歩くと、
突然、雷が鳴り、強い雨が降ってきた
「ガガガッガーーー」「ザーーー」強い雷と、大粒の強い雨だ
目の前に大きな稲妻が走った。
二人は、走った・・目の前の町が揺れて見える・・・
ユイカ「おにいちゃん、なんなの、これ・・・」
ナオト「あああああ、目の前の景色がゆれてる。。何だ?吸い込まれるぞーー」
ナオトは、強い力で吸い込まれるを感じた

ユイカの手を離れないようにつかんだ

数分渦をまいてるトンネルの中を通過するような感覚だ

ユイカ「奥のほうに、光がみえるわぁあ」

光のほうにすすうんでいく。

ナオト「あああああああああああああああああああ」

二人は突き飛ばされるように、トンネルから押し出された。

トンネルから押し出される前に、小さい光が二人を追いかけてくる

すると、晴天の明るい世界にでてきた

ユイカ。ナオト「まぶしい・・・」

二人はまぶしいので手で目をおおった。

ユイカ「おにいちゃん、ここはどこなの？」

ナオト「わからないが、ビル一つない・・山と時代劇で見たような古い家～」

ユイカ「城があるわ・・どこなんだろう」

ナオト、「目の前に屋敷がある、門番二人が槍をもってるけど。時代村？日光？」

ユイカ「あたしが、聞いてみるわ・・」

ユイカが、屋敷の入り口に向かう

ユイカ「すみませ～ん、道に迷ったんですがぁ。誰かいますかぁ！？」

門番「なんじゃ、こいつ異人かぁ・・」門番は槍を向ける
ナオト「異人って、、、冗談を（笑）どっかの劇団ですか？いい演技しますねぇ。入場料払う所なかったですね」
ナオトは、てっきり時代村と勘違いしている

屋敷から5人の兵が出てきた、

「こっちへこい！！」
緊張した様相で二人を取り囲んだ。
　ボディチェックが始まった
兵「武器はないな。危害を加えるものではないな、密偵もしれない、縄をかけろ！！」

二人は数人に体を縄をかけられ、屋敷の奥につれていかれた

ナオト「どうしたんだ・・・マジらしい。。まさか・・・」
ユイカ「えーーーー、やばくない？・・・」
二人は、タイムスリップしたことを、少しずつ疑いながら感じていた。

ナオトは三成の末裔

ナオトと、ユイカは屋敷の奥に監禁された。

三成は所用で大坂城に行っている

大広間につれていかれた。

渡辺勘兵衛が大広間に待ち受けている

（この勘兵衛という人物は、柴田勝家が１万石で招聘しようとしたとき、１０万石を要求し断り、

また羽柴秀吉が２万石で招いても、１０万石にこだわり断っている。

ただそれだけの逸材ということで、他の大名にも評価は高い人物であった。

その勘兵衛を、当時４００石取りの三成が家臣に抱えた。）

勘兵衛「縄をほどきなさい」

傍人が縄をほどいた。

ナオトとユイカは、手がだるくなったのか、手を大きく上にやったり振ったりして痛みをほどいた。

勘兵衛「そなた、二人はどこの国の物だ異国か？、名はなんという？」

ナオト「石田直人といいます、妹はユイカ　石田三成公の末裔（まつえい）でございます。」

ナオトもユイカはまだ、４００年前の世界にきたことを確信していない

ナオト「失礼ながら、今、年号は何年でしょうか？」

勘兵衛「慶長４年三月２日でござる。」

ナオトとユイカは、お互いびっくりした顔で目を合わした
この時点で、戦国時代にタイムスリップしたことがわかった。

勘兵衛「なに！末裔だと。無礼な！！」

そのとき、二人の持ち物を没収した家来が、勘兵衛のまえにカゴごともってきた

勘兵衛は、この時代にないものばかりで珍しく物色した。携帯電話、手帳、サイフ、ハンカチ
異国の人間とおもわれてもしかたのない物ばかりだ

勘兵衛「うううっ、これは。。。。。」

二人のサイフを見て勘兵衛の動きがとまった・・・
サイフには、大一大万大吉の文字が・・（石田家の家紋である）

勘兵衛「ま。。まことか。。殿の末裔なのか・・」

ナオト「はい、そうです末裔です。しかし、３月２日なら明後日の４日の夜に黒田長政、福島正則、細川忠興らが３０００の兵を挙げて襲撃してくるはずです。」

勘兵衛「それはなかろう、殿は五奉行の筆頭である、夕刻に殿は大坂城から帰ってくるからそのときに、お話されよう　ゆるりとすごされよ。」

ナオトとユイカは、危機を脱した。

三成襲撃の動き、三成急ぎ伏見屋敷に向かう

渡辺勘兵衛「殿を襲撃・・・・まさか。。。」

渡辺勘兵衛は、自分でナオトにそれはない、と言い切ったが。。
内心は、いろいろ逆恨みをされるよう因果あるのを知っていた・・
反三成の筆頭武将、黒田長政、福島正則、加藤清正らは、朝鮮出兵で、それなりの功績をあげたとの自負がある、それが認められないのは三成の策略とおもっていた。

渡辺勘兵「だれかー、。だれかいないかー文を大坂の殿に至急とどけよー」

殿（三成）襲撃の動きがあると文に書いたのである。

大坂城　三成

三成は、島左近や護衛の兵数十人をつれている
三成に文（ふみ）が届いた

三成「左近、この文の内容だが・・・俺を襲撃するという　・・」

左近「・・・・もしや・・」

左近の恐れていたことが、起こったという顔をしている。

左近「殿、大阪城の用事はおわったので、早馬で伏見の屋敷にかえりましょう」

三成「うむ・・」

三成は、うなずいた。。

三成、「まさか、未来から子孫がくるなど。。。夢にもおもえぬのう・」

三成は大阪を発った

三成、ナオト、ユイカ　3杯のお茶

女衆がユイカ（ナオトの妹を呼んだ）

女性たちが花をいけている。楽しそうだ～

ユイカ「わたしも、花を生けましょうか～」

ユイカは背筋をのばして淡々と花を生け始めた～

ユイカは、お茶、花、着付け、語学すべて極(きわ)めている。四越デパートでも財界人、海外の要人の接客をまかされている。

そのとき、はげしい馬の足音がした

「　ザッサッザッ　カポッカポッ・・・・」

「ヒヒイーーンーーーーーー」

馬が、屋敷の前に到着した

門番「殿のおかえりーーーー」

三成も、島左近も息を切らせている～

「ハァ、ハァ・・・・ハァ・ゴホッ・・ハァ・・」

屋敷中に入った

三成「のどが渇いた、茶をくれー！」

ユイカに、三成の声が聞こえた

ユイカ「私が、茶をたてます。」

三成も左近も奥の座敷に移った。

ユイカはすぐに茶をいれた
始めに大きな茶碗に、ぬるめのお茶をいれた

三成、左近「ゴクゴク・・・・・。パァーー」いっきに飲み干した

次に、半分ぐらいの器にすこし熱いお茶

最後に、小さい器に熱いお茶をいれた。

三成、は、熱いお茶を口に注いだ
　呼吸も、整ってきた・・・「美味じゃ！」
少し落ち着くと、
三成「　うむ、これは、太閤殿下の出会いの時と同じだ！俺が太閤殿下にお茶をおだししたときとまったくおなじだ」

観音寺に、佐吉（三成）は子どものころ預けられていた、秀吉が鷹狩りに出た帰りに喉が渇き寺に寄った、佐吉がこの３杯のお茶をだした。そして、頭の良さを買われてスカウトされたのだ。

三成は目を閉じて在りし日の秀吉を思い出した。「太閤殿下、・・・なぜ、豊臣恩顧の諸将が私を襲うのでしょうか、、悲しみと怒りで心は満ち溢れています・・・・」

三成「だれじゃ、このお茶をいれたのは」

ユイカとナオトが三成の前に現れる

ユイカ「私です」

三成「髪の毛が、褐色だな、首から金属の鎖がひかっている、異人か？どこで、教わった？このお茶のいれかたを・・」

ユイカ「これは、石田家先祖代々受け継がれたものですよ」

三成「この、兄妹が拙者の子孫か、・・・・」

渡辺勘兵衛が部屋にはいってきた

「殿これを」

二人から没収した、石田家家紋入りのサイフをみせた

三成は、なんどもうなずいた・・少しずつ子孫であることを納得していった

三成「拙者が襲撃されると？・・３０００の兵がおしよせてくるとは。。。いかにするか・・」

三成は、マユをひそめた

ナオト「三成様、二人でお話させてください。」

三成「皆の物、さがれーー」

石田三成一族が、滅びればナオトもユイカも消える

三成とナオトは、奥の部屋に二人ではいった

月も星も綺麗にみえる晴れ渡った日である。

三成、「さて、どうやって福島、黒田、一派の襲撃をかわそうか・・・」

ふたりは、空を眺めながら、考えていた

そのとき、丸い光が見える・・・・

三成「なんだ。。。。こっちにむかってくるようだ。。。」

丸い発光物体は、二人をめがけてものすごいスピードで天から舞い降りてくる・・

「シューーーー・・・・」

ゆっくりと、大きな羽で仰いでおりてくる

巫女のような、小さい若い女性、体全体が紫色にひかっている・・

ナオト「アカハラ（鳥の神）・・・・来てくれたのか・・」

アカハラ「ナオトが時空のトンネルにはいってしまったときに、追いかけてきました・・」

ナオト「あのときの、追いかけてきた光は、アカハラ、だったのか。

。。」

三成「この、巫女はなにものであるか？」

ナオト「私の守り神です・・・」

アカハラ「ナオトさん、大変なことになりましたね！この時代に来てしまった以上。あなたは石田家の末裔（まつえい）ですから、石田家が滅亡すれば、あなたの家族もきえてしまいます。」

ナオト「なんと・・・・・・４００年後に帰れないというのか・・・・」

アカハラ「あなたを助けに来ましたが、急激に歴史をかえてしまうと時空におしつぶされて消えてしまいます。　あなたに、力を与えます。鳥の戦士としてのパワーを。戦いが始まるとナオトの意思はほとんどなくなります。２割ぐらいでしょうねナオトの意思は。戦って石田家を守るしかないのです。」

ナオトは、立ち上がった。
アカハラは両手をナオトのほうに向けた　アカハラの目が青い光を帯びている
両手をナオトの方に向けた

「ビリビリビリ・・・・・・・」
アカハラの両手の指先から、青い光線が発しられる・・・
ナオトの全身は、青い光線で帯び光を放ってる

三成「なんという光景だ・・・・・」

「バタン・・・」
ナオトは気を失って倒れた・・

数分後、意識を取り戻した

ナオト「なにがあったのか。。。。うむ。」

もう一人の鳥人としてのナオトが目を覚ましたのだ。

ナオト「三成殿、明後日に襲撃があるので　明朝　佐和山城にお逃げください」

アカハラ「鳥人たちが石田屋敷に滞在します、そうすればさとられません」

三成「うむ４時間ほどでいけるはず。。。。ここで、自分が死ぬわけにいかない。秀頼公をお守りしないといけない　馬鹿どもがーー（福島、黒田、細川ら・・）」

ナオト、「佐和山の正澄殿に兵をだし、迎えに来るように文を書いてくだされ鳥が文を運びます」

「バタバタ・・・パタパタ・。。。。」

文を足に縛った鳥が佐和山に向かって飛び立った。。
見る見るうちに天に吸い込まれていった

翌日　早朝４時　石田屋敷に居る者はすべてて佐竹義宣屋敷と、宇喜多屋敷に身を隠した

三成と島左近は佐和山城に馬で向かった

三成、左近二人５０人の忍者に囲まれる危うし！

三成と島左近は、佐和山城に向かって馬を走らせている

伏見徳川家康屋敷

本多正信「殿、服部半蔵がきております」

家康「通せ！！」

半蔵「半蔵めにございます」頭をさげる

服部半蔵は伊賀の出である、伊賀の忍者に通じている

伏見にも多くの忍者を忍ばせている。

家康「いかようにした・・」

半蔵「石田三成が動いたようです・・・屋敷から二人馬で琵琶湖のほうへ向かったとの知らせが草のもの（から入りました）

正信「近江なら甲賀の草のもの（忍者）の本拠地です、すぐにつなぎを（連絡）とりましょう。見つけたらいかにしましょうか？」

家康「二人で、隠密な行動で佐和山にむかったとなると消して（殺しても）もかまんだろう。こちらの動きが悟られないように消せばよい！」

正信「わかりました、殿、おまかせあれ」

三成、左近は大津に向かった堅田水軍を利用し、琵琶湖から佐和山

城にいこうというのだ。

甲賀忍者の動きは、早かった・・・・おそろしいほどの情報伝達のスピードである

独特の高い音色の笛の音がする、庶民にはかすかにしかきこえない、
「ピーーー、ピーー、ピイピーーー」
その笛が、つぎつぎと遠くにひびいていく　・・・
あっという間に、琵琶湖周辺に伝達していった
忍者だけに聞こえる周波数なのだ

三成は大津まで来た・琵琶湖がみえてきた・・・・・
琵琶湖のほとりについた・・・
琵琶湖は、水鳥たちがたくさんいる

朝の６時ごろである
晴天で明るい
すがすがしい、風が気持ちいい～
町は静まりかえっている

三成「左近、ここでしばらく休んで船をまとうぞ」
左近「わかりました、殿・・・・・・　」
「殿　曲者です、・・」

水鳥たちがいっせいに空に舞った～
「パタパタパタ、、、、」

２０人の忍者にこっちに向かってくる
「ピーーー、ピーー、ピイピーーー」
忍者が仲間をよんでいるのだろう

忍者が沸いてくるように増えてきた

総勢５０人にもなった・・・

三成「左近、・・・逃げれるか！」

左近「完全に、多勢に包囲されました・・・」

敵は１００メートル先に迫った

救援の堅田水郡の船が５隻向かってくるのが見えた

もう岸辺につくところだ

石田三成の軍勢が乗っている。

左近「くそぉう・・・・・間に合わぬか・・」

・・・

三成琵琶湖で甲賀忍者に襲われる

船から声が聞こえた「殿～～～殿～～」

石田家家臣　青木市左衛門　浅井新六である。

伏見石田屋敷のナオト

ナオトの頭の中の画像に石田三成の危機の場面が映し出された

ナオト「まずいな。。。すぐ攻撃しなければ・・」

三成周辺の、こうもり、水鳥、カラスからの情報が上空に旋回してるトンビに情報が集約されナオトの脳裏に映し出される。

アカハラ、「じゃ、鳥軍をおくりましょう」

ナオトのテレパシーが三成に送られた・・・・

堅田水郡の船の上から、兵がおりてくる。船の上から数十人から矢は放たれた

矢は、忍者にとどかない。

三成の前方の船の方向の忍者１０人が向かってくる、

絶体絶命だ・・

すると空から、鳥の大群でうまった。

数千羽いるだろう

３０羽がおりてきた、そして鎧を着た武士になった。
背中には、飛ぶための大きい羽がついている・

上空２０メートルのところから向かう１０人に向けて矢を放った。
「うっ。。。」「わぁ・・」
１０人は、なすすべなく倒れた
残りの忍者４０人も攻撃をしかけてきた。

石田家の兵３０ともみ合いになった。
「ピー、ピエー」
仲間を笛で呼んだのである。

甲賀忍者の御大　多羅尾光俊が甲賀忍者と地元の野武士合わせて２００をつれて到着した

多羅尾光俊が大きな声で叫んだ

「三成殿、おぬしには遺恨はないが、時の定め。お命頂戴もうす」

ナオトのテレパシー「三成殿どうされよう」
三成テレパシー「多羅尾光俊の首をはねて家康に送ってやろうぞ」

本能寺の変の後、徳川家康が明智軍に囲まれたときに多羅尾光俊は、自分の息子たちに命じて、家康を山城の宇治田原まで迎えに行かせ、自分の本拠地・信楽に招き、、翌日伊賀の丸柱口まで送って救出している
家康の側近である、やつの仕業だとおもった。

圧倒的な人数で、石田三成、らを攻撃し始めた

大津の山々、湖、川、そこらじゅうからアカハラ（鳥の神）の命（命令）で鳥が終結した
空が鳥で埋まった・・・
明るい空が黒く染まった

その瞬間、鳥の数百羽の塊が急降下し多羅尾光俊の体を埋めつくした。
一瞬の出来事である。
数秒すると、鳥がいっせいに離れて空に。

飛んでいった

首のない多羅尾光俊が立っている
「バタッ・・・」
体は、ひざから倒れた

甲賀忍者たちは、戦意を失った。

鳥軍は、上空から攻撃した、
１００羽の鳥軍が弓を引いた
鉄砲は音で世間に知れ渡るので弓を使っている
矢の攻撃をうけて忍者はバタバタたおれていった

野武士、忍者は恐れをなして四方八方に散っていった・・
しかし、上空の攻撃からは逃げられない。
下からと上空からと視界がまったく違う。
矢も、上から下の重力がかかり速度も増し威力が倍増する。
ものすごいスピードで目標を捕らえる

甲賀。野武士は、全員矢で射抜かれ死亡した。

死体には数千のカラスが群がり、死体は食い尽くされた。

甲賀者はこの戦いを語るものさえいない。

三成、島左近は難をのがれ船で佐和山城についた。

琵琶湖から3キロほどである。

青木市左衛門　浅井新六「殿、お怪我はありませぬか。」

三成「大丈夫だ！このことは内密にしておけ。伏見の石田屋敷には俺の影武者がいる」

青木市左衛門　浅井新六「城の者にもいいきかせておきます。」

三成の報復、家康伏見屋敷

三成、左近は、朝９時に佐和山城に着いた

島左近「殿、家康に何か仕掛けて様子をみたほうがいいのではないでしょうか？」

三成「そうだな、こちらは誰が襲われたかもしられていないし。証拠はないからな」

三成はナオトにテレパシーを送った。

ナオトわかりました、「まかせてください」

ナオトの、鳥軍は夕うごいた

家康伏見屋敷　夕刻

門番がふたり入り口にいる

屋敷は、明かりが　各部屋ついて明るい。さすがに家康の屋敷だところどころに見張りがいる。

家康「正信、今頃、三成はあの世にいるだろう・・・」

正信「間違いありません・・」

家康「さて、次の手をかんがえねばな・はははは・笑」

「カーカーカー、チュ、チュチュ」

鳥の鳴く音がする、どんどん多くなっていく。

空　一面に鳥が飛んでる。

１５０羽が急降下した、そして地上２０メートルのところでとまり
鎧を着た鳥人に変身した
空中で静止している。
火縄銃を構えてる。

５０羽の超人が鉄砲を屋敷に打ち込んだ
「パン、パン、パン、パン」
門番、庭の護衛兵、すべて撃ち殺された。

庭の木の枝も、障子も、吹き飛ばされていく
第二陣が発砲する「パン、パン、パン、パン」

「キャーー、おおーーー、逃げろーーー」
「殿ーー」悲鳴でパニック状態だ。

本多正信「殿ーーお伏せくださいーー」
家康は頭を抱えながら伏せている。「なんだ、これは・・」
「であえーーであえー（守りの者攻撃しろ）」

第三陣も発砲する「パン、パン、パン、パン、」
「バキ。、キィーン。バキ・・・・」

鉄砲の音が静まると、

中から、護衛の者たちが弓と槍をもって数十人でてきた

１５０羽の鳥人は、鉄砲をすてて弓で攻撃をする
「ヒュンーーヒューン、シューッー」
三段階に攻撃をする。

守備隊は全員射抜かれ殺された。
すべて破壊されて抵抗する力はない
嵐が去り、屋敷は静まり返った
琵琶湖から飛んできた隼の群れが、白い布に包まれた丸い塊を屋敷の中に落としていった
鳥軍、鳥、隼は、遠い空に消えていった・・・
「バタ、バタ、バタ・・・・」
屋敷は、攻撃によってボロボロに壊された。
しかし、だれも鳥軍、鳥人をみていない。、
見た人間はすべて殺された。
本多正信「殿、ご無事ですか・・・・」
家康「だ・・大丈夫だ・・・」
本多正信「殿、庭に白いものが、札に家康どのへ、とかいてあります」
二人は庭におりて、白い布をとった・・・
本多正信「こ・・これは。甲賀忍者のの大将多羅尾光俊殿の首・・・」
家康「命の恩人の多羅尾光俊が変わり果てたすがたに・・うううっ」
「・・半蔵を呼べ!!」
家康は、身の危険を感じて次の日　伏見城に入った。

伏見石田三成屋敷襲撃

家康は、伏見の屋敷を襲撃されて伏見城に入った。

三成を襲撃するという情報を知った佐竹義宣があわててやってきた息を切らせている、よっぽどあわててきたのだろう。

「三成を襲撃するというものどもが今晩襲ってくる。ハァハァ・・とりあえず宇喜多殿の屋敷にお逃げくだされ。」

三成（影武者ナオト）「是非にあらず。お心ありがたい。」

三成は、進言を断った

三月三夕刻日　黒田長政を筆頭に　細川忠興　福島正則　加藤嘉明　浅野長政らが集まり三成を襲撃将と集まった。

黒田長政「三成の讒言（ざんげん・・告げ口）によって、われわれは迷惑をこうむった。太閤秀吉・前田利家公がなくなった今三成を討つ時がきたぞ！！」

福島正則「そうだ、われわれが朝鮮で命かけて戦ってるときに、本国で戦いもせずに、われわれが不利になることばかり太閤に告げ口をしおって・・・許せん」

加藤「攻撃あるのみ」

浅野「おおおーー」

５人の怒りは頂点になった「今から、石田三成屋敷を襲撃して三成の首をとろうぞ！！」

事が決まって、すぐに彼らは動いた

かがり火をもった兵が動く

外は真っ暗である

５人の武将は　３０００の兵を石田三成屋敷に進めた・・・

石田三成伏見屋敷は、ナオトが三成の影武者になり　あとは鳥たちが人間に化けてふつうの屋敷の生活をかもしだしている。

細川忠興「灯りがついてるぞ三成どもは中にいる、よし、攻撃せよ！！」

黒田長政が采を振った

「攻めろーーー」

鉄砲隊は、はしごで塀の上に乗り鉄砲を構えた。

「カチャ、カチャ・・」

門を、大きい木鎚でたたいている

「ガーン、ガーン」

石田屋敷の周りは屋敷の周りは石田三成攻撃の兵たちで埋まった

鉄砲隊の鉄砲が連続して火を噴いた！！

「パンパンパン・・パパパパパパン!!」

伏見石田三成屋敷襲撃２

黒田長政、福島正則らの軍勢３０００は、石田三成屋敷を攻撃し始めた。

鉄砲隊の集中砲火だ！「

「パパパパパン・・・・ババババババ・・・」

音が鳴り響く

軍勢は「屋敷に、なだれこめーー、皆殺しだーーー」

「うおおぉおおおーーーーー」

「ダダダダーーッ」

大軍が、屋敷になだれこんだ

しかし、伏見石田三成屋敷に居る人間は、ナオト鳥人（三成の影武者）と鳥が人間に化けたものである。

いっせいに、鳥となって空に飛び立った・・・

屋敷は真っ暗になった・そして外も真っ暗である。

「ザザザザーーーーー・ザザザー」

強い雨が突然降ってきた。

福島正則「ど、どうなっているんだ！！屋敷には、だれもおらぬ。」

浅野長政「おかしいな、屋敷は３０００人の兵で囲んでいる。逃げられるはずはない・・」

そのときである。

「うおっ。。グエェ」

バタっと、兵が倒れた。。。次々兵が倒れていく・・・

屋敷は、うめき声と、恐怖のが鳴り響いた・・・

「うわぁあああああ、」

真っ暗のなかで、何がおきたのか判らぬまま　兵が倒れていく・・

真っ暗闇（くらやみ）の上空から数百の鳥軍が　弓矢で攻撃しているのである。

黒田連合軍からは　上空から攻撃してる鳥軍がみえない。

パニックになり、暗闇の中逃げ惑う兵と兵がぶつかり合う。。。

黒田長政　細川忠興「退却しろーーー退却だーー」

°

黒田長政、福島ら３０００の兵が全滅

暗闇の中、福島、黒田、浅野、細川。加藤、浅野らの武将の兵３０００が攻撃したが
屋敷はものけの空だった。

そして、暗闇の中から石田直人の鳥軍が天井から雨のように矢をはなった

武将、兵はパニック

空からは、森林、山、湖、川、あらゆるところから鳥が集まり鳥軍（羽の生えた武将の軍隊）があられた

その数は、かぞえきれないほど。１万はいるであろう。
「放てーーー」
「おーー」
「ピシューー・・ピシューー」

降り注ぐ雨のように、矢が天井から降ってくる

「わーー、にげろーー」
兵たちは、上空のどこから矢がふってくるか上を見た
降ってくる矢で目を射抜かれた
「ギャーー」
「ギャーー」
悲鳴が所々で響く！

武将や、兵は屋敷の中に逃げ込んだ。

屋敷にはいれない兵たちが、屋敷に押し込んでくる・

屋敷に入れない兵たちはことごとく、矢で射抜かれた・・・

武将、兵たちは屋根のある屋敷ににげこんだ

福島正則「なんてこった、、、天から矢が降ってくるとは。。。。」

浅野長政「夜が明けるまでここでしのぐしかないなぁ」

そのときである

空はパッと明るくなった

空には、火矢の弓を構えてる数百の鳥軍が浮かび上がった

黒田「なんだ・・兵が空を飛んでいる・・」

「シュッ。。シュッ。。シュッ」

「ボーーーーー、ボーー」

屋敷は炎が上がり、一気に燃え上がった・・・

もう、袋のネズミだ。。。。」

屋敷が燃え始めると鳥軍は、空のかなた消えていった・・

鳥軍の石田直人は、テレパシーで三成と会話した

ナオト「やつらを、迎撃しました・・・これでよろしいでしょうか・」

三成「家康か、首謀者は。。一気に家康の首を討ってくれ・・」

ナオト「わかりました」

鳥の大群　鳥軍は家康のいる伏見城に向かってとんでいった・・

・・・

・・

緊迫する伏見城家康・

黒田・福島襲撃軍を殲滅したクロス屋ナオトの鳥軍は、家康の居城
伏見城をめざした。

伏見
家康屋敷が襲われたために　身を守るために伏見城に入ったのだ。
ただ、そのときは、何者におそわれたかは、わかっていない。
伏見城　完全鉄壁な、守りである。

城では、家康の入城祝の酒宴が行われていた

家康の直属の家臣たちだけである。井伊直政　本多正信　榊原政康
酒井重勝鳥居元忠　ら大勢である。

能が舞われた

家康「みなのもの、今日はごゆるりと酒を所望しようぞ」

能楽がおこなわれ
酒の席はもりあがった

大久保忠佐は、大きな声をはりあげた「酒井忠次・酒井重勝殿、本能寺の変の後明智軍を逃れるために伊賀越えをしたことがなつかしのう・・・あの時はよくもいきのこれたものぞ！」
「これも殿（家康）の強運と神通力のおかげでありますぞ！」

「そうぞ！！」「殿のお力ぞ！！」

場は盛り上がった。

家康は、秀吉からもらった信長の陣羽織(じんばおり)をはおり、満足そうに酒をのんでいる。

「殿、伏見の屋敷で火事です」

家康「早く、調べなさい」

そこに足音が「ダダダダダっ・・」

服部半蔵　一礼　頭を下げる「殿、石田三成屋敷が燃えております・・・」

家康「なに、三成の屋敷が・・・か・・願ってもないことだ。。。よしよし・・酒がうまいわぁ」

正信「三成がいなくなれば、殿の天下もちかいですなぁ・・・ハハハハッハ」

忍者があらわれ半蔵に耳打ちしている・・

半蔵「殿、今、情報がはいりまして。黒田、福島ら３０００の軍勢が三成を襲撃しましたが。何者かに反撃されて、ほぼ壊滅したらしいです。」

家康「今日は楽しかったぞ・・それでは世はそろそろ休む・・あとはゆるりと酒をのまれよ・」

家康は、その情報を家臣に知られないように家康の部屋にもどった
半蔵が部屋に入ってきた
家康「三成屋敷の軍勢はどうなった・・３０００の軍を壊滅すると
は６０００・・いや一万の軍勢がいるかもやしらん・・となると、
こちらも物騒であるぞ！！」
「福島、黒田らのバカものが。。先走りおって・・・」
城の警備が堅固といっても、急に一万の軍勢で攻められたらひとた
まりもない・
半蔵「それが、兵は一人たりともいないのでございます。三成や屋
敷の者どもも一人もいません・」
家康「今日は夜も深いそろそろ寝ようとしよう。。半蔵よく調べて
おけ・・」

半蔵「わかりました。」
家康「誰かおらぬかーー、酒と亀（側室）を用意しろ！！」

「ははーーっ」

修羅場を生き抜いてきた家康には幾度とこういう危機があったので、
落ち着いている
家康は、膳を用意し、酒を飲みなおした・お気に入りの亀の方（徳
川義直の生母となる）にお酌をさせた
家康「・・世間はいそがしいが、世はそちと居るときが一番心がな
ごむ・・」

亀「殿は、おつかれのようすですねぇ、、」

家康「さて。。寝るとするか・・」

二人は眠りにはいった・・

家康の最後になるか

ナオト率いる鳥軍は、伏見石田三成屋敷から伏見城に向かっていた

家康は、側室、お亀の方と寝ていた

伏見城の守りは完璧だったが空からの攻撃には弱かった。

ナオトの鳥軍は次々と城の家康の部屋にはいった・・・鳥なのでたやすくはいることができた

部屋にはいり、武将に変身した背中には、大きな羽がはえてる

２０人の鳥軍が家康の部屋に押し入った・・・・・

廊下にいる、守備のものはすべて腹を一撃で殴られ。。気絶している。

守備のもの十人は、手足を縛られ。猿ぐつわをされ・・納戸に押し込められた

家康・・「何だ、貴様らは・・・・」

ナオト（三成の影武者）「お命頂戴いたす・・」

家康も屈強な２０人の武将に部屋で囲まれて観念したのだろう・・

家康「側室の亀の方だけはにがしてやってくれ・わしは時の運。命

はしかたがない」

さすがの家康である

武将は、亀の方をおなじようにして納戸に押し込めた

家康「よいぞ、、介錯いたせ。。」

家康は正座し、着物のはらをだし短刀を腹にあてた。

ナオト「御免！！」

ナオトは、家康の首にむかって上から刀を振り下ろした！

ナオト時空に押しつぶされる

ナオトが、家康の首めがけて刀を振り下ろした

その瞬間

「ピカッ！」

音はしないが、部屋の中が目をあけていられないほどの明るさに一瞬なった

明るすぎて物がみえないぐらいだ

その後は真っ暗に

「あああああああああ」

ナオトは、時空のトンネルの中に吸い込まれていく

ものすごいスピードだ

なにか白い物体が　ナオトをおいかけてくる

「ナオト！！。。」

アカハラ（鳥の神）がナオトの手首を掴んだ

アカハラ「ナオト、つかまってなさい！！現世にもどってしまうのよ！。あなたは、家康を殺そうとしたのでしょ、だから時空に押しつぶされて抹殺されそうになったのよ・・・家康は、大きな歴史を

つくったひとだから。。。はじめ、いったでしょ！！歴史をかえようとしてはいけないって。

ナオトは、時空のトンネルから現世にもどろうとしていた。

部屋は、真っ暗になったが次第に明るくなっていた

家康「なんだこれは・・・夢だったのか・・・」

横には何事もなかったように側室のお亀の方がねている。

お亀の方「殿さま。。すごい汗ですよ。。お拭きしましょうか？

家康は、夢の中でおそろしいものをみたと。。。お亀の方に話をした

家康「いや、、、夢なのか・・」

現世にもどった。ナオト

ナオトは、戦国時代から現世にかえってきた。

ナオトは、夕方　ユイカ（妹）とお好み焼き屋の「角山」の帰りに時空のトンネルにひきずりこまれて戦国時代にはいってしまったのだった。

ナオト「しまった。。ユイカは戦国時代にいるままだった。伏見宇喜多屋敷に預けたままだ。このままだと未来の人間が過去にいるときは歴史が動いてしまう・・・石田一族が滅びると現世の石田家は消滅してしまうのだ・・・」

ナオトは家にかえった「ただいま・・」

父（弘）「おそかったな。。ユイカは先に帰ってるぞ」

母（しのぶ）「仕事のファックスきてるわよ・・・角山のお好み焼きおいしかったらしいねぇ」

ナオト「・・・・・・・・・・・なんでユイカがいるのか・・」

ナオトは、家の酒屋のおくの自分のオフィスにはいった

ファックスがきていた、以前工事した中古住宅の二階の部屋の窓枠がきたないのでダイノック（クロスより硬い材質、エレベーターの中にはってあるもの。種類は多くある）をはってくれというのだ、木目である。

ナオトはドアをあけてユイカを呼んだ「おーい、ユイカーちょっ

ときてくれ！」

ユイカが部屋にはいってきた

ナオト「おぼえてないか、。。戦国時代のことを・・なんでユイカがいるか」

ナオト「あっ・・わかんないか。。そうだよな・・」

ナオトは現世にいるので、戦国時代であったことが夢かと一瞬思った・・

ユイカ「いいえ、わたしは、アカハラ（鳥の神）から命をうけたユイカの影武者です」

ナオト「やっぱり、戦国時代でおこったことは事実か・・・」

戦国時代に戻り、石田家とユイカをすくわなければ

ナオトは、戦国時代にもどらなければ石田家は破滅することがわかっている。

悩んだあげく父の弘と母のしのぶに相談した

石田家の家族会議である。

ナオト、母、父、ユイカの影武者との家族会議である

ナオトは、今まで起きた戦国時代の話と目の前のユイカ（妹）が影武者であること、そして戦国時代へもどり石田三成をたすけなければ家族が消滅することを語った

普通なら、アカハラ（鳥の神）の力をかりれば戦国時代にもどれるのだが

家康を殺そうとして歴史の流れをかえようとしたペナルティのため、たやすく戦国時代にはかえることができない。

ナオト「そういうことで、どうしたら戦国時代に戻れるかということなんだー」

母「いきなり、なんてこといいだすの。。。。なにがなんだか、さっぱりわからないわ」

弘「俺もだ・・・・だが　それが事実ならたいへんなことだ・・」

ナオト「このユイカは、アカハラの手下の鳥が変身したものなんだよ」

ユイカの影武者「そうです、わたしは鳥です」

母「ユイカは、ユイカよいつものユイカと変わらないわぁ」

ナオト「お母さん、お父さん、ユイカの影武者の背中には翼がある
んだよ」

母と父は。半信半疑である

そして、ユイカが服をぬぎだした、上半身はだかになった

母、父「あっ。。。。。。・・・・・・・・・」

驚きで次の言葉がでなくなった

羽がはえてる。

この時、母と父は大変なことになっていると気がついた

母と父は天を仰いだ・

ナオト父の決断

ユイカが戦国時代に取り残されたこと、戦国時代で祖先が絶滅すれば現世の石田一族は消滅してしまうこと。

石田家は、パニックになっている。

ナオトは保土ヶ谷の以前した仕事の、二階の窓枠周りの木のダイノック貼りにでかけていた。
窓枠の天板は、日に焼けて張物の板はめくれてくることがおおい。

以前貼ってある、ダイノックをキレイにめくり。専用接着剤（プライマー溶剤）をぬった
しばらく置いて乾いたら、ダイノックシートをはるのである。

ダイノックシートはシールのようになっている。少しずつめくりながらヘラで圧着して貼っていく
エレベーターのなかの、つるつるな壁面もダイノックシートである。
ナオト「よし、おわった。。」

四葉不動産の部長で友人である平松から電話がかかってきた。

平松「ごくろうさん、どうだ。おわったかダイノック。細かい仕事でわるいなぁ」
ナオト「いやいや、いつもありがとう・」
平松「ナオト、聞いたぞ、嘘のような話だがナオトの家たいへんなことになってるらしいね。ナオトのおやじさんが、いろんな方面に連絡して対策をねっているよ」

以前にも紹介したがナオトの父は　大手　谷村証券ニューヨーク支社長で伝説のディーラーであり世界でも有名である。　悪意あるヘッジファンドと相場で壮絶なる死闘を行いその、ヘッジファンドを壊滅させて一躍有名になった。すべてを伏せて酒屋のおやじをしている。

父　弘は　一家の存亡を賭けた戦いに挑む決心をしたのだ
ニューヨーク、ロンドン、チベット　イスラエル　アフリカ多彩衣なる人脈で弘は動いた。
普通の人間なら、過去の世界で戦いをするということなど誰も信じはしないが。
弘の、人望と経歴、そして、ほとんどの人が弘に世話になっている
　平松もその一人だ
世界中から弘いや、石田家をを助けようと関係者がうごきだした。

ナオト「平松、この話は一般ではしないでくれ。。」
平松「あたりまえだよ、他言したら業界から消されるよ」

ナオト「おわったし、帰るよ。。またたのむね。」

ナオトは電話を切った

白山開祖泰澄大師の弟子　福井　法澄

父弘は　世界中の宗教家　霊能者　預言者をスカイプで連絡をとり会議をひらいた。
いろいろな意見を聞いた結果　過去、現在を問わず日本で起こっていることなので日本で解決することがだいじという結果になった
並外れた霊能力・パワーがないと戦国時代にはもどれないのである。
そして、泰澄大師の流れを汲む弟子法澄に助けを得ることにきめた。

泰澄の戒名する前の名前の法澄の名をもらったのである。

泰澄大師は、飛鳥奈良時代　修行せよという天の声を聴き修行を重ね力を付けた。
それによって恐るべき霊能力を身に付けたのである

その後　元正天皇の病気平癒を祈願し　当時の大流行を極めた天然痘（ウイルス感染症）を収束させている　恐るべき霊能力である

泰澄は、白山を開き　その後、霊山となり修行するものが絶えない
石川県小松市粟津温泉の湯元も霊能力でみつけだしている
湯元の前には泰澄大使の銅像が建っている
父（弘）は　ナオトに電話をした

弘「ナオトか、明日福井に行くぞ。仕事は全部段取りして、キャンセルしなさい。一刻の猶予もない福井の泰澄大使の弟子法澄に助けを願いにいくことになった」

ナオト「わかった、明日はやく福井にいこう」

福井県　越知山　大谷寺へ法澄に会いにいく。

ナオトと父、弘は福井へむかった

泰澄大師の弟子　法澄の力を借りにいこうというのだ

月島から浜松町へタクシーで

浜松町から羽田までモノレールで向かった

晴天である

モノレールは、高速道路のように　高い位置を走っている

ビルがずっと続いている

田舎では考えられない光景だ

都会のど真ん中を走り抜けている　いや日本のどまんなかである

高層ビルや　大きな町が目に前を駆け抜けていく

ナオトは思った「この近代的な時代に、神秘的な世界に頼らないといけないとは。。。けっよく世の中は近代化しても、。。どうしょうもないことがおおいんだな。ましてや。過去の戦国時代で今の世の中を変えようとしてる動きがあるなんて、だれもしらなんだろうなぁ・・」

モノレールには、たくさんの人が乗っているが、そんなことなどだれもしるよしがなかった

普通の朝である

父弘「ナオト、ひさしぶりだなモノレール・・うっ。なんだ・・」

弘に　目の前のビルの屋上に　戦国時代にいる石田三成と娘ユイカが見えた

走り去るモノレールの窓には、残像として映っている・・

弘「なにかの、間違いか。。ちょっと疲れてるのかな」

弘は目頭を押さえて、なんども深く瞬(まばたき)した。

二人は、羽田に着き　石川小松空港まで５０分のフライトを終わらせ

小松空港についた・・・

石田親子　法澄大師との修行

石田ナオトと父弘は、小松空港についた

小松は、源義経が頼朝に追われた弁慶との物語で有名な安宅の関所がある。歌舞伎では勧進帳（かんじんちょう）といって有名だ

レンタカーを借りて小松インターから高速道路で鯖江インターまでいき。

大谷寺（おおたんじ）は、福井県丹生郡越前町（旧朝日町）にある天台宗の寺院へむかった

完全なる山の奥である、山をこえると日本海である

二人はお寺についた。

玄関で「こんにちわーー」なおとは声をかけたが返事がない

本堂にに、二人ははいった

法澄が瞑想をしている

法澄「うむ。。こられましたか・・瞑想のなかで二つの光が東のほうからこちらに向かってくるのがわかりました。」

ナオト、弘（父）「はじめまして、よろしくおねがいします・・実はですね。。」

法澄「いいですよ、いわなくても天の神からすべてのことは聞いて

ます・・」

ナオトと、弘は顔をみあわせた。。すごい力のひとだと確信したのである。

法澄「すべては、あなたたちが死を覚悟して天の神々に認められるかです・・がんばってください。ただ命の保証はできませんよ。」

ナオトと父の顔は険しい顔になり
二人は、目を合わせうなずいた

「よろしくおねがいします」

そして、修行がはじまる・

最後の修行、火の神

ナオトと父は、修行に入った

夜7時ごろから村人３０人ぐらい集まり。

お寺の前でで、おおきな篝火(かがりび)がたかれた。遠巻きに村人が見守る中

ナオトと父弘は、日の前で御経をとなえはじめた。

村人と法澄は。遠くから御経をよんでいる。

すると火の神が舞い降りた！

ボオォオオオオオオオオオ・・

奥の杉林も燃えてる。。すごい勢いだ

天まで火があがった。。。

空へと渦を巻きながら大きな火の塊が天にむかって上っている

地上にいても熱い・・・・・天に上った火の塊が地上へむかって恐ろしいスピードで向かってくる

法澄と村人は寺の裏に非難した。

ナオトと父弘は目を閉じて御経をとなえたままである

火は一気に二人を飲み込んだ。。。。。。

二人は気を失った

火の塊は天に向かった・・そして人の形になった

火は幻覚であったのだ火の神のつくりだした・・

山の神「いいだろう、法澄　二人を助けることにしよう。気に入ったぞ」

そして、山の火、や火という火は全部消えた・・

法澄「二人はがんばった。。。 風呂でもはいりなさい」

二人は、すべての力をつかいはたした・・・

法澄、「明日は、一乗谷へいって滝にうたれますぞ。。。

はやくねられるがいい。。」

一乗谷の滝

ナオトと父弘は、法澄（泰澄太子の弟子）と一緒に一乗谷に来た

一乗谷は、朝倉一族の地のである。
北陸の京といわれた歴史ある朝倉の地である。

一乗谷の滝は剣豪　佐々木小次郎が修行した地である、「つばめがえし」も、ここで作られたという話だ。

二人は大きな滝に打たれた・・ものすごい勢いで上から水が降ってくる

両手を合わせ、一心不乱に御経を唱えてる
法澄は、はなれたところから御経をとなえている。

晴天だった空が、一瞬に雲に覆われた

ピカッ！！　ドドドドドーー

雷がおちた

その瞬間滝の流れ落とす、水が１０倍になって二人を襲った・・・

ザザザザザーー

どこにいったのか。。。。。

二人は消えた・・

水の中から二人の御経だけ聞こえる・・・

すると、雲の間から光がさしてきた・・・

空から声が・・「よし、いいだろう、山の神がおまえらを守ろう・・」

一気に水もなくなって、ふたりは倒れている

そして、空は明るくなった・・

あの空からの水も幻覚であったのだ

ナオトと、弘は、空みあげた。。。

胸でいきをしてる

弘「ナオトだいじょうぶか。。。」

ナオト「あああ、おやじも。。だいじょうぶか」

法澄「明日は、越前海岸で最後の修行がある。。なんとか耐えなさい！」

福井越前海岸

ナオト、弘（父）法澄は越前海岸に来た　福井の日本海に面したところである

越前海岸玉川温泉　玉川洞窟観音とういうところでお祈りをするためである

いいつたえによると、仲哀天皇が海上からこの地を訪れたときに、暴風により海が荒れ転覆しそうになりました。その時、海中から観世音菩薩が龍に乗り現れると海を鎮め天皇の命が救われましたという
ここに、十一面観音と泰澄大師の像がある。
海の守り神としてお守りにくるひとも多い

三人は、お参りをした・・・

法澄「さて、いきますか・・」

越前海水浴場の砂浜に三人は立った・・・

法澄「これから、命がけの祈りになります、海の神にわれわれに加勢しろと祈ります。火の神、山の神は味方してくれますが、海と三つの神が協力してくれないと過去の戦国時代に戻る時空の入り口はひらかれません」

三人は、御経を唱え始めた

法澄は、両手を海に向けて「泰澄大師、我に力をあたえたまえ！！はぁーーーっ」

一気に空は暗雲につつまれた、遠くでは水しぶきの竜巻が数個あらわれた

ゴーーーー　強い風でふきとばされそうだ

遠くのほうから、大きな津波がやってくる

海の神「俺に加勢しろと？命令するなんてもってのほかだ、」

大津波が目の前４５度の角度で三人を飲み込もうとした・・・

ゴォーー　ものすごい音がする

飲み込まれようとした瞬間

津波に、空から水が大量にふってきて津波を押し返そうとしてる。。。

津波が、大きな水のちからで押しし戻されようとしてる。。

法澄「山の神が全国の滝の水で応戦してくれてるのだ」

すると、火と風が津波にぶつかっている。。。ゴーーーゴーー

津波は沖に、押しこめられた。。。そして海は穏やかな海にもどった

海の神「山の神、火の神がくるとは、なぜ人間どもに協力するんだ」

山の神「こやつらは、なかなか面白いやつらだ、坊主は泰澄さんの弟子だよ」

火の神「どうだ、海の紙も人間の戯言(ざれごと)につきあってみないか？過去へいって戦うというんだ・・おもしろそうだぞ」

海の神「二人がそういうならわかった、泰澄の弟子ならなおさらだ」

法澄は、お礼の御経を唱えた・・

これで戦国時代に戻る準備ができたのである

大谷吉継（刑部）よみがえる・・

越前海岸　玉川温泉の海辺で　三人が大きく動く海をみていると

海を越えた山の方向（滋賀のやまの方角）から生首がこっちに向かって飛んでくる・・・

ナオト「なんだこれは。。。」

大谷刑部「だれじゃ。。。俺を眠りからさましたものは！！」

顔に白い布を巻いた生首が数メートルの大きさになって語った・・・

大谷刑部は関が原の戦いで小早川秀秋の裏切りによって部隊が壊滅して自刃した

疱瘡にかかってる「醜い顔を一目にさらすな」との命により、介錯した家臣の湯浅五助は、首を守って岐阜の土に埋めたのである。

法澄が両手を、刑部にかざした。天の力　泰澄大師のパワーをおくっているのである・・・

醜い顔を隠している　白い布はひらりととれた・・・

法澄の力で、刑部の顔は精悍な美男子の顔に、胴体も現れ。武将の読みがえった・・

刑部は、自分の顔からだを両手でまさぐり、自身の顔、体が復活したのを感じた

そして、法澄、ナオト、父、刑部の四人は事の経緯を刑部に話をした・・

法澄「刑部殿は、もはや、人間ではない。時空をこえて戦国時代にもどることができる。われわれより一足先に、戦国時代にいってほしい。ユイカを救ってほしい。われわれも、時空の壁をこえることができれば、すぐにいくので」

刑部「わかりもうした、憎きうらぎりもの小早川秀をたたきつぶしてやろうぞ！」

そして、刑部は、消えて戦国の時代に向かっていった・・

家康江戸へ、体勢をととのえる

上杉、石田三成が各大名に家康攻撃の密書を飛ばした。

家康は、江戸にもどり体勢をととのえた。・・

家康のつぎの大大名毛利１５０万石の動きも封じ込まないといけない
毛利家の代表　毛利輝元を味方に引き入れる必要がある　毛利輝元
は毛利家の三代目のボンボンである
野心家ではない。

毛利派の吉川広家は東軍支持、安国寺は西軍　毛利家の動きを決め
るはげしい綱引きが繰り広げられた

五大老の一人　上杉景勝が反家康の方向をはっきりとさせた。

家康「正信。ついに動きがでてきたな、上杉めが・・」

正信「殿、全国の大名に書状をおくってます豊臣恩顧の大名もほぼ
掌握しました。。前田利長が態度をはっきりさせてません」

家康「利家の子で１００万石あるとおもって甘ええているんだろう。
人質を取れ」

前田利家は　柴田勝家ＶＳ秀吉の合戦　で佐久間盛政と共に賤ヶ岳
の戦いに参戦し
様子をみ、戦線離脱している。利家が離脱しなければ戦況は変わっ
ていたといわれている

前田家は、後の小早川秀秋となんらかわらない裏切り者といわれてもいる。」

親の子だ裏切りを平気でする物と家康はみている。

正信「かしこまりました」

後に、利長の母親　芳春院（まつ）が人質に江戸におくられた

家康は命令に反すると、前田征伐をすると脅したのだ

超部（生まれ変わった大谷形部）戦国時代に

超部（生まれ変わった大谷形部・・吉継）が戦国時代にかえってきた

石田三成の居城沢山城では。大谷形部が三成に呼ばれて登城していた

醜い顔を布で隠している、疱瘡ににより顔がくずれている

石田三成「形部、。相談がある。。。」

形部「どうした。まさか」

石田三成「家康をほおっておくわけにいかない。、家康を打つため

に挙兵する」

形部「やめとけ。おまえは、豊臣恩顧の武将たちにきらわれている。

。考え直したほうがいい・・」

石田三成「このままにすれば、自然と家康の力が増して秀頼公は一

武将になってしまう。。。」

形部「それも、時の運だ。。。どうしても挙兵するのか？」

三成「だから相談してるのだ。。。頼む・・・・・・」

形部「三成は敵が多い、大将は、毛利輝元、副大将は宇喜多秀家、

参謀に島津このへんにしておけば。我が西軍に味方するものも多い

だろう」

三成「わかった。。それはすべて形部にまかせる、小西行長と進め

てくれ・・」

そこに、超部（生まれ変わった大谷形部）が現れた・・・

超部「あはは。、。醜いかおじゃのう。。。形部・・」

形部「なにっ！！であえぇーーー」形部は超部を睨みつけた

三成「不届き者、、ひっとらえろ””」

護衛の家来が２０人ほど刀を抜いて超部に襲い掛かった

家来の刀を風のようにヒラリ　ヒラリとかわす。。

刀が超部にあたらない。。。。。。。

横に斬ろうが、たてに斬ろうが、、、、かわされる・・

超部「はははは、、、形部。。。おぬしは、俺だ。。。おぬしは今作戦を練っている関が原の合戦で小早川秀秋などの裏切りによって部隊は殲滅され、自害したのだ。。。。。のちの世（未来）に泰澄大師の力をかりて生き返ったのよ・・・」

形部「なんと・・・・・・」

超部は、形部の体にすいこまれるように入っていった・・・・

そして形部は消えた・・・

三成「な・・・なんと。。形部の顔がきれいになっている・・・」

超部「もうすぐ、前田利長が加賀（石川の福井との県境）大聖寺城（２万石）

に攻めてきますぞ・・拙者が前田を向かえ打ちましょう

前田利長は、家康から謀反の疑いをかけられてあわてて挙兵したのである

その数2万5千の兵

前田利長は、背後を上杉に突かれる恐れがあった。。

上杉をけん制するように、伊達政宗に文を書いた。。。

伊達政宗「おもしろくなってきた。。。。内府（家康）が動いたか。。俺にも天下のチャンスがあるやもしれない・・・前田か。。。とりあえず、上杉をけん制だけはしておこう。前田の為に兵力は失いたくないからなぁ」

三成は、毛利輝元を大将、宇喜多秀家を副大将にして。西軍を編成した

佐和山城のユイカ（ナオトの妹）

超部が、三成と話を詰めている

三成「家康が伏見から江戸に移った。。そろそろだ・・・俺の挙兵をまっているのだろう」

奥からユイカが現われた

ユイカ「お茶をもってまいりました」

超部（大谷形部の生まれ変わり）「ユイカ殿。。話はナオト殿からききました。。。

力の限り協力する所存であります・・・遅れてナオト、法澄（霊能力を持った泰澄大師の弟子）がこの時代に現われるはずです。父も元気でしたよ。。修行されたのでパワーをたくわてます。」

三成「明日。毛利輝元が大坂に入る。。西軍の大将として・・くるが吉川が家康に内応しているようだ・・毛利も一枚岩でないからなぁ。」

「宣戦布告として、伏見城を攻めよう・・・」

超部「加賀の前田が動いたようだ。。小松城の丹羽長重をたすけねばならない、」

超部は、戦略をねった

前田利長　西軍大聖寺城山口玄を2万の大群で攻める

家康から謀反の疑いをかけられた利家の子利長が疑いを晴らすために動いた。

石川県加賀市大聖寺城は、福井県との県境にある。

金沢　前田家との距離的に中間点に丹羽長重の構える小松城がある

家康は、目の上のこぶの前田利長の動きを監視しろと長重に命じた

長重は了解した。

しかし、長重の知らないうちに前田と家康は和睦し話をすすめて大聖寺城を攻めにきた。

まったく長重のしらないうちに利家がうごいている。

長重「なんということだ、おれをないがしろにしおって。」

長重は、西軍として利家を向かい打つ話を超部（うまれかわった大谷形部）にした。

超部「伏見城攻めに兵はいるが、かならずお助けもうします：」

と文をかいた。

前田利長は慶長五年七月二十六日２５０００の兵を、大聖寺城向けて出兵した。

丹羽長重の小松城は、素通りしたのである。

大聖寺城主　山口玄藩（やまぐちげんば）は北ノ庄の青木一矩（秀以）や小松の丹羽長

重に救援を依頼したのだが、間に合わない。
大聖寺城には２０００の兵しかいないからである。
丹羽長重は、大聖寺城をめざしている。

大聖寺城は、急角度ののぼり坂の山城で攻略しぬくい。
山口勢の右京亮修弘と前田勢の山崎長鏡の戦いから火蓋がきられた

圧倒的な兵力で前田勢が襲い掛かる。強力な鉄砲隊の一斉射撃・・

山口勢は奮戦している。。

超部（大谷形部のうまれかわり）は堅田水郡を率いて兵３０００日
本海から加賀大聖寺城に向かう
超部「ふんばってくれ、玄藩・・・・もう一息で参戦するぞ！」

大聖寺城攻略

大聖寺城下は、前田利長の２５０００の兵で溢れかえった
大聖寺城は完全に包囲され　波状攻撃をうけている

城下や周辺の農民は、この地域は浄土真宗の門下がほとんである
４里ほど離れたところに、吉崎御坊（本願寺直轄の寺蓮如の里　現願慶寺）がある
そのころの、吉崎御坊は山の上に寺を構えており、周りは湖に囲まれており。
戦術的にも要塞になっていた。

大聖寺周辺の村人たちは、すでに吉崎御坊にのがれた。
吉崎御坊に集まり、町をまもるために対前田の一揆軍が結成された、
その数２０００名

利長「なかなか、落ちぬなあ、山の裏道をさがすのだ。。勝利は確実、降伏させるのだ」

利政（利長の弟）「敵の援軍はきません、、今日は酒宴をひらきましょう」

夕刻になって酒宴がひらかれた。

利長「明日、総攻撃をかけるぞ、段取りをしとけ」

山崎長鏡「大聖寺城の山のふもとの荻生村の村人が密告してきました、荻生に城に登る抜け道があるらしいです、そこを攻めましょう」

利政「うむ、三手にわかれ　正面上り口　右階段上り口　　荻生裏道で総攻撃をしかけよう」

夜、遅く超部（大谷形部の生まれ変わり）の軍が日本海をとおり加賀塩屋河口から大聖寺川を上り吉崎御坊へ着いた

　吉崎御坊願慶寺についた、軍勢と一揆軍は４０００人にも膨れ上がった　軍勢はまわりの道場（寺）や民家で歓迎され食事をし、休憩した。

吉崎御坊願慶寺和田氏「ようこそ、超部殿　お疲れを癒してください」

超部「かたじけない、なんとか前田を撃退せねばなりません」

和田「明日朝総攻撃があるります、荻生の密偵から連絡がありました・・」

超部「　明日朝３時ごろにしかけましょう、前田の背後から丹羽長重が攻撃をしかけるので陽動作戦でいきます。４時間ぐらい兵を休ませましょう」

そのころ福井県北の庄から青木一矩の２０００の兵も大聖寺に向かっていた。

に

天海大師　時空の結界をつくる。

天海は、天台宗の僧で生まれながら恐るべき霊能力と予知能力をもっている、

家康は、天海を呼びこの世のありさまを問うた。

家康「天海殿、この世の流れどう思われますか？不思議な軍勢に伏見で襲われたり、撃退したはずの兵の死体が鳥になっていたり。。不思議なことばかりである。」

天海は、天をにらみ目をとじで瞑想に入った・・・・

家康は、じっと展開をにらみつけてる。

天海が、全身を震わせながら数珠で両手をすりあわせながら拝んだ額から汗が流れ落ちた。　そして全身の動きが止まった瞬間大きく目を見開いた！！

天海「　これは・・異な時（異次元・未来）から何者かが恐るべき力で現世に念をおくっています。時の壁を越えて、異な時から奴らがもどってくれば上様に大きな危害がくわえられることでしょう。すでに、その仲間（超部）がこの世にまぎれこんでます。一人ではたいした力は生まれないでしょう。奴らがもどってこれないように早急にに結界（時空の壁）をつくる事が大事です」

家康　「天海殿にまかせよう、江戸に大きな寺を建ててそこで全国の僧を集め異な時の力を封じるのだ」

天海「わかりました、明日から僧侶を集めパワーを送ります」

明日、天海の号令のもとに、２００人の僧侶が御経を唱え念をおくりだした

僧侶たちは一日中朝まで　三交代で２００人ずつ火を焚き御経を唱えた

１０日目のことである

天海、「そろそろ念の巨大な力がたまりました。最後です」

６００人の僧侶が江戸城に集まった。

夜　日が変わるころ僧侶のお経の声と霊気が頂点に達したときに、光の竜巻がおこった

ゴーーー、ものすごい音を立てて光が天に昇った

日本中に聞こえる地響きとともに天の光は地球を覆った。

天海「ついに、結界（バリア）ができました。皆さんご苦労様です。ゆっくり休んでください」

僧侶たちは、疲れ果てて立つこともできない

この結界で　ナオトやアカハラ（鳥の神）たちは時空のトンネルの入り口をふさがれ戦国時代にもどることはできなくなってしまった。

江戸城西の丸横に天海寺落成！

慶長５年（１６００年）７月２０日　江戸城西の丸横に天海の城ともみえるような巨大な寺が完成した

家康から命を受け、潤沢な資金で寺が建設された　大礼拝堂は　天井壁はすべて金箔で覆われていてきらびやかなまぶしいほどの光を生み出す。

家康は、寺にはいった「おおお、まさに豪華である！」
家康は首をたてに振って、満足そうにうなずく

天海「家康殿、屋根には巨大な鏡をそなえてあります（設置）これで全国の霊力、異な時（時空を超えた）攻撃も撃退することもできます。また　邪悪な念を攻撃することもできます」

家康「よろしゅうたのみもうす」

翌日　家康は江戸を出発した。下野小山（栃木県）に向かった

時は動く！西軍結集

石田三成の、策略によって西軍諸将がうごきだした。

大将の毛利輝元は、豊臣秀頼公をお守りするために大坂城に入った。
副大将　宇喜多秀家
島津義弘　安国寺恵瓊　毛利秀元　立花宗茂　小早川秀秋　小西行長
長宗我部盛親　長束正家　上杉景勝　大谷形部

西軍は、徳川家重臣　鳥居元忠の１８００名の伏見城攻めに向かっていく

天海によって、現世のナオトや法澄の霊能力が完全に封じられた今、歴史は刻々とすすんでいく
現世の人間、ユイカが戦国時代居なければまったく何の問題もないのだが・・・
現世の人間が戦国時代にいるかぎり、歴史はぬりかえられてしまうのである。

超部（大谷形部の法澄の力を借りたうまえらかわり）の霊力も天海の天海寺からのパワーでうすれていく。

大聖寺城攻略、超部最後の策略

慶長５年８月１日。西軍　４万の大群で１８００人の鳥居元忠の守る伏見城を１０日かけて落とす

大聖寺城は２５０００人の前田軍の大群に囲まれて窮地に陥っている。大聖寺城の兵力は２０００人

早朝に前田軍を攻撃することを察知した超部は。大聖寺城に深夜にはいった。

江戸城の天海に結界をつくられたため、現世の法澄から霊能力を受け取れないために徐々に力が衰えてきた。超部の使える鳥軍は５０人だけである。

大聖寺城には　３０人の鳥軍を配置した。

大聖寺城の側面の荻生ののぼり口から前田軍が攻めるという情報をキャッチしたため。水軍２０００は大聖寺川の荻生上り口に待機した。

日の出と共に
鉄砲を合図に戦いがはじまった！

圧倒的な２万五千の兵力と火力で城主山口玄永の軍は崩されていった・・・

山口「超部殿、もはやこれまでかと。。。」
激しい鉄砲の乱射の音が鳴り響く

超部「しばし待たれよ！手前の鳥軍を１０人　江戸の芳春院　岡山の豪姫に向かわせている。そろそろ・・・・・・」
芳春院とは、前田利家の正室である、豪姫は前田利家の４女である。
秀吉の養女であり夫婦に寵愛されたその後　宇喜多秀家の正室になる

鳥軍ハヤブサ　岡山城　へ

鳥軍ハヤブサは時速２００キロ～３００キロで飛ぶことができる
　岡山城に着いた
大谷吉継の使いのものだと書状を見せ、豪姫（宇喜多秀家の側室）と対面した。

鳥軍「突然の無礼、申し訳ありません、時をいそぐので馳せ参じました」

豪姫「なにがあったのだ、まさか。殿（秀家）身になにか・・・・」

鳥軍　超部が霊能力で大谷形部で乗り映るっていることを話をした。そして、未来に関が原の戦いで西軍が破れ夫、宇喜多秀家が流人になり生涯会うことができなることを説明した。
豪姫の目から止めどなく涙がながれた。。
豪姫「うっ。。。・・・殿・・・」

芳春院（母）と共に前田利長の大聖寺城攻撃を止めさせてほしいことを豪姫に協力をもとめた

豪姫は、頬の涙を拭いた・

豪姫「分かりました。。われは、何をすればよいのじゃ。」

鳥軍。ハヤブサに乗り移ってもらいます。豪姫の影武者は城に残しておきます。

豪姫「ならば、お守りにキリスト様の十字架を首にさげていきまし

ょう。」
豪姫はキリシタンである
常時身に付けている十字架の上にお守り用の大きな十字架(ネックレス)を首に下げた
超部の霊力は弱まっている、霊力が途切れたらすべてはおわってしまうのである。
豪姫と鳥軍は、豪姫の影武者を岡山城に残して。江戸前田屋敷に向かったのである

前田家江戸屋敷

鳥軍と豪姫は、江戸についた前田家江戸屋敷（現、東京本郷）

そして、空中から地上に鳥軍１０人と豪姫はおりたった。鳥から武将、豪姫と人間の形に変化した。

屋敷の門の前に来た

豪姫護衛筆頭　早房勝衛門が大声でどなった「であぇーーであえぇー」

門番はたちが、数人現れた・・・

「なんの御用でござる」

「拙者、備前の守　正室　豪姫をお連れ申した、芳春院（ほうしゅういん）様にご面会ねがおう！」

門番　「わかりもうした、しばし待たれよ」

門番の一人が屋敷にはいった、

前田家家老　村井又兵衛　「何事だ・・・」

門番「豪姫様が、芳春院様にご面会を願ってます」

村井又兵衛「なにを、たわけたことを・・豪姫の名を語る　盗賊や

もしれない、手勢をつれて拙者が面会してみよう・・・」

村井は　数十人の手勢をつれて門に向かった・・・

前田家江戸屋敷豪姫潜入

前田家家老村井又兵衛が、門の前に武装した手勢を連れて現れた・・

鳥軍筆頭　早房が前に、そのた鳥軍の武将が壁になって守っている

ので又兵衛からは豪姫がみえない・・

又兵衛は、東軍と西軍の争いの最中に西軍大将宇喜多秀家の正室が

現れるなど、頭からおもっていなかった。。

又兵衛「　早房殿。。この東軍と西軍の争いの中で西軍の大将の備

前の守の側室が　いまや実力が日本一の徳川内府様の本拠地の江戸

にこれるはずがないのだが・・・そちらは、何が目的か？」

前田家の手勢が鳥軍たちに槍を向けた！

一発触発の状態になった。。。。。

鳥軍の奥から声がした。。。

豪姫「又兵衛！」

又兵衛〜？・・・・・・・・・・・・はぁ？」

そのとき、鳥軍たちが左右にわかれ、豪姫がまぶしいほどの着物姿

で中央にあらわれた

又兵衛「・・・・まさか・・」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7039s/

クロス屋ナオト関が原の合戦

2011年11月19日21時35分発行